

No. 321【2018年8月31日配信】

大野村にあった「農村幼稚園」(担当:鈴木)

こんにちは、嘱託員の鈴木です。明日からは9月。空にも秋の気配が感じられますね。

さて、今回はかつて東津軽郡大野村にあった「農村幼稚園」をご紹介しますと思います。

大正14年(1925)7月7日、大野尋常高等小学校(昭和43年に金沢小学校に統合)幼稚園部として農村幼稚園が開園しました。県内にはすでにいくつかの幼稚園が設立されていましたが、それは都市部にしかなく、この大野村の幼稚園は青森県で最初につくられた農村部の幼稚園でした。

入園できたのは就学1年前の幼児で、大正15年度の記録をみますと保育期間は4月～11月で火・木・土曜日の週3回。時間も午後1時から2、3時間ほどですから、のちに創設が奨励される農繁季節保育所(託児所)のように働く父母のために幼児を預かる施設とは異なります。園児数は40名、運動会や唱歌遊戯会は小学校と一緒に行いました。

農村幼稚園という名称は正式なものではないようですが、この少し前に千葉県女子師範学校附属農村幼稚園が創設されており、こうした幼稚園をつくりたいと大野小学校の南由造校長をはじめ職員、保護者会が協力して幼稚園部を設立したようです。この千葉県女子師範学校の平田^{ひらたけぞう}華蔵校長は千葉県の農村幼稚園の普及に尽力した方で、大野村の幼稚園創設も援助するとともに全国に紹介しており、また南校長も千葉県の幼児教育の状況を視察しています。

開園にあたり、大正14年7月24日付25日夕刊から3日にわたり『東奥日報』に「入学前児童教養問題としての農村幼稚園」という論説が掲載されています。それによれば、日本の教育が欧米に追いつかない大きな原因として幼児保育機関の不備がある。とくに近年、農村疲弊の救済策として農村文化向上を図るため青年教育が奨励され、青森県でも農村部に尋常小学校卒業後に進む農業補習学校などがつくられたが、就学前幼児の教育はなおざりになっている。さらに、幼稚園教育は贅沢なものと思われるが、幼児にとって生活は即学習であり、そこから学んだことは就学後の学習の土台になるとして幼児の就学前準備教育の必要を説いています。



幼稚園部が置かれていた旧大野小学校
(昭和23年撮影、国土地理院の空中写真)

大野村に幼稚園がつくられた翌年には、幼稚園の目的や制度を定めた「幼稚園令」(大正15年4月22日制定)が出され全国に多くの幼稚園が設立されるようになりました。ですが、この時期に農村部の幼児教育に取り組んだ千葉県と青森県の試みは、なかなか先進的だったのではないかと思います。

その後は毎年40～50人の幼児が入園し、昭和9年(1934)には幼稚園部創立十周年記念式ならびに記念幼児運動会が举行されました。しかし、昭和16年12月の日米開戦後の物資不足等で運営は難しくなっていき、昭和20年3月には空襲の危険もあってやむなく幼稚園部は廃止されてしまいました。